エッセイ

アタマの無駄遣い

植村　仁一

大変に気の短い友人がいる。まるで落語の「気の長短」に出てくる短七さんを地で行くような男だ。彼は何かを大人しく待つことが苦手なのはもちろん、野球やサッカーの試合、映画や演劇、朝の連続テレビ小説といったものが苦手である。じれってぇ、という。

だから行列のできる遊園地や飲食店を嫌う。さる遊園地に行った時は最初の乗り物の行列で仰天し、その後帰るまでの数時間、行列のない「射的」で遊んでいたという。

通りすがりに行列のできる飲食店があると「飯食うのに並ぶか？　馬鹿か？」などとあたりを憚らない（彼の見解です）。「思っても口にしない」という我慢も苦痛らしい。

彼曰く、映画は一定の時間席に拘束されるから（筋を追うのも）苦痛である。フィクションなら結末は知る必要がないし、ノンフィクションでも結末が知りたければ調べればよい、という。だったら映画など見に行かなければよいのだが、一応「家庭サービス」の気はあり、家人に誘われて稀に映画館に入る。しかし忍耐は極めて短時間しか持続せず、案の定ＣＭや予告篇が始まると「早く終わらないかな」と思い始め、全篇が終わるとホッとする。そして「映画とは拘束から解放されるこの瞬間のためにある」と半ば本気で思っている。もちろんストーリーなど何も覚えていないし、そのうち映画を見た事実さえ忘れてしまう。「これでポップコーンが嫌いだった日にゃ目も当てられねぇ」という。

野球やサッカーといった時間のかかる試合観戦も苦手である。もとより競技自体に興味がないようだが、結果が新聞に載ると知っているので長時間（テレビですら）見続けられない。あとで新聞を見るかというと、たいていの場合、試合があったこと自体忘れてしまっている。彼を見ていると、なるほど「物事に興味がない」というのはこういうことなのだろうと感心する。そして、やはりというべきか、相撲はすぐに勝負がつくので好きなのだ。こういう人間には試合に数日を要するクリケットなど見せたら悶絶するだろう。

朝の連続テレビ小説に至っては初回と最終回だけ放送すればよく、途中経過は不要と考えている節がある。時計代わりのテレビから毎朝否応なく目に入るが、最終回近くなると当初に想像したような結末が見えてきて詰まらねぇ、という（彼の見解です）。

面白いのは、だからといってこの男が「結果を知ること」に重きを置くのかというとそうでないところだ。例えば昭和歌謡の有線放送が流れる煤けた居酒屋に入るとする。頼んだビールがすぐに出てこないと怒るのは毎度だが、むかし親しんだ曲を聴いていると、当時の風物や見聞きしたことに思いを巡らすところは彼も同じようだ。

例えば我々が中学生のころ、派手に踊りながら歌う二人組の女性歌手がいた。女子生徒

が教壇でその真似をするのは休み時間の定番の光景だ。すると、そのころ起こった「関西の銀行での立籠り」などという事件を思い出す。すると二人で「思い出し合戦」が始まる。

そしてこれが「猟銃」を持った「梅川昭美」という男が「三菱銀行」の「北畠支店」に立籠った事件（犯人射殺）である、というところまで記憶を掘り起こし、一段落をみる。

次に有線放送から「ぶりっ子キャラ」で売った女性歌手の歌が流れる。すると当時の「金属バット殺人事件」を思い出し、一頻りの「思い出し合戦」となる。

ついでに当時覚えた古文や漢文、数学の公式、果てはあまりにも繰り返し聞いたために覚えてしまった池田高校やPL学園の校歌に至るまで、「思い出し合戦」は続く。

そうした時、気の短い彼はどうしているかというと実に楽しそうなのである。結論がすぐ出ないとイライラするのではないかと思うのだが。

聞いてみると、「俺ァね、アタマの無駄遣いをしてんだ」という。彼によれば「知っているはずの（記憶した事実は明らかな）ことはアタマのどこかに必ずあるんだ。アタマが悪りぃ奴ァそういったものを掘り起こせねェから駄目なんだ」という。こういうのは訓練で思い出すのも早くなるのだそうだ。

というわけでわたしも訓練してみることにする。手始めに、少し前に話題になった人を思い出してみよう。

- 「号泣県議」（NN村議員・下の名前は結局思い出せず）
- ゴーストライターを使っていた自称作曲家（SM河内守）
- ついでにその下請けの人（N垣氏・下の名前はやはりわからず）
- 某女性議員に「ち・が・う・だ・ろー！」と罵倒された方の秘書の人

最後の人については、罵倒した側の女性議員の印象があまりにも強いため、ハゲだということ以外思い出せなかった。わたしの訓練はまだまだ緒に就いたばかりである。

ところで、大勢の飲み会でこういう遊びを始めると、すぐスマホを取り出して調べてしまう人がいる。わたしはそれを残念に思う。気の短い彼が言うようにこれは経過を楽しむ遊びなのだ。携帯もスマホも持たぬ彼が同席していれば別の意味で怒ることであろう。

とはいえ、やがてお開きとなり、さて二次会に流れよう、という時にはそうした「スマホ人（びと）」は重宝な存在だ。店を調べ、予約を取る。知らない店の電話番号といった「かつて覚えたことのないもの」はどんどん調べてもらう。これは気短な彼にとっては野球や朝ドラのように「結果だけ知ればいいこと」だ。彼の目にはスマホ人は口を利く電話帳くらいにしか映っていないことだろう。

彼に倣い、精々アタマの無駄遣いをしよう。お金の無駄遣いができる人はお金持ちの人だ。時間の無駄遣いができる人は暇な人だ。となれば、アタマの無駄遣いができる人はアタマに余裕のある人だ、ということになる。

先日別の後輩と飲み屋でそんな話をした。若干おツム軽めの彼は目を輝かし「そうっスねー。アタマの無駄遣い。いいなぁ、面白いっスねぇ」という。

「ところで『昔覚えたことは忘れない』って成句、『雀百まで……』じゃなくて、似たような別のがあったよね」と話すと、「あ、それわかりますよ……　OK Google！」

ち・が・う・だ・ろー！

（うえむら　じんいち／アジア経済研究所開発研究センター）